

「信じずにはいられない」私の「歎異抄」との出会いと、その行き着いた先は。

26歳のころ友人で浄土真宗の寺の若院であるM君の誘いをうけ仏教讃歌を歌う合唱団に入会しました。経典や和讃それに仏さまをたたえる歌を唄う合唱団で、そのころの私は宗教に特段の興味は無く、また実家は他宗派の仏教でしたので、浄土真宗の歌を唄うことにいささか戸惑いがありました。練習を重ねていくうちに、少しずつ歌詞の意味が気になり始め、お念仏や、阿弥陀如来さま、親鸞聖人と、浄土真宗で使われている言葉を理解したいと言う気持ちが湧いてまいりました。

それからしばらくたって「歎異抄」を知り、その直接的な語りかけに深く感動を覚え、繰り返し返し拝読するようになりました。その第一章の「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏もうさんとおもいたつころのおおるとき、すなわち撰取不捨の利益にあらずけしめたもうなり。……云々」と親鸞聖人は述べられておられます。

冒頭の「弥陀の誓願不思議にたすけまいらせて」の箇所がなかなか理解できず、かなりの時間を要しました。私が念仏ももうさんとおもい立つころがおおると、弥陀の誓願のたすけにあずかり、往生を遂げることが、わかりやすく述べられています。容易すぎて逆に疑念が生じ、永い堂々巡りの歳月が続きました。やがて、念仏を思い立つそのとき、とき同じにして弥陀の本願不思議のはたらきにあずかり、往生を遂げることが出来るかと気付かされました。まさしくこれは信じずにはいられないのだと納得させてもらえました。私にとってはなにか、背中をぐつと押されたようにも思えます。

弥陀の誓願は十劫の昔からすでに私のところに到着していて、それに少しも気付かなかつたのです。親鸞聖人は正像末和讃の始めに「弥陀の本願信ずべし 本願信ずる人はみな 撰取不捨の利益にて 無上覚をばさとるなり」ときつぱりと言い切っておられました。いまは、お念仏の深いところに触れさせていただき、お経やお正信偈ご和讃、それに仏教讃歌を唄う、毎日を充実感と共に過ごしております。 合掌

